

明治卅四年

一月二日

三宅於菟松退舎ス

十日

本莊義雄歸舎ス

十二日

竹田茂入舎ス

二月

三日

坂本太次郎入舎ス

九日

午後七時より常集会を開き会食腹に満し、相撲、腕推等勇氣的の遊戯に遂にうつり軍歌を以て清く終りたり、時既に十一時なり

十九日

河野孝太退舎ス

三月

五日

広瀬久雄雨龍へ旅行ス

十八日

森四郎歸省ス

十五日

広瀬歸舎ス

廿一日

井街顯歸省ス

廿四日

武田平三郎退舎ス

廿八日

池田競旭川へ旅行ス

午後六時頃より会食ス

四月

六日

池田競歸舎ス

十一日

奥井信三歸舎ス

十二日

井街顯歸舎ス

十五日

長く学僕たりし笹部志積中学校入学試験に及第せしを以て舎を辞し 家に行く

廿日

例の如く会食し 后七時より役員改撰を為ス、以前の如し、遊戯して拾一時散ず

廿二日

速見武雄学僕に来る

五月

二日

廿四日

村上雄之助入舎ス

六月

廿九日

卒業生井街頭の送別会を開く為め牛飯にライスカレーを夕飯とし散歩し来りて再び着席して初めに池田競君舎生一同の代表にて井街君の此まで寄宿舍に尽されたる厚きを謝するの辞あり、次に宮部舎長の井街を送るの辞と次の副舎長として黄金井君を照会す、次に井街君より不肖の身にて今まで静かに諸君と共に居るを得しは諸君の各々自治体を守る、によると又后来此の寄宿舍は記憶を去らす云々の答辞ある其より役員の改撰を為す、当撰者は、拾二点橋本、十七点工藤敏雄、十八点竹田、廿二点広瀬、次点は吉田、藤井、阿部、鈴木等なり、受持は橋本君書記新聞、工藤君賄、竹田君衛生、広瀬会計其終りて后、茶菓を喰ふ、后遊戯して拾一時に終り散会す

七月

一日

末光績帰省ス

九日

坂本太次郎帰省ス

黄金井解三后任副舎長トシテ舎二入ル

十一日

鈴木力活帰省ス、小川良五郎帰省ス

十二日

井街舎長朝八時ノ汽車ヲ以テ此地ヲ去ル

十五日

池田競朝八時ノ汽車ニテ帰省ス、十六日橋本健三郎旅行ス

十七日

広瀬久雄朝八時帰省ス

十八日

足助素一、河内ノ両氏旅行ニ出発ス

十九日

工藤敏雄、安部忠一ノ両氏出発ス

午後八時半橋本健三郎帰舎ス

廿三日

本荘義雄帰省ス

廿五日

米山、河江秀雄氏宅へ宿泊スル事ニナル

廿六日

江藤俊治外泊セリ（証明書持参ス）

吉田守一帰省ス

八月二日

竹尾東京ニ旅行ス

八月四日

午後十時足助帰舎ス

教員一名願ニ依リ宿泊ヲ許ス

八月七日

嶋野帰省ス  
八月十三日  
上谷良造入舎ス(夕刻)  
八月十七日  
吉田守一帰舎ス  
八月二十四日  
夜三吉助十入舎ス  
二十六日三吉光明旅行ス  
八月三十一日  
本荘義雄帰舎ス  
九月一日  
森四郎帰舎ス  
九月三日  
河内完治帰舎ス  
九月四日  
夜高松正信入舎ス  
広瀬久雄、末光績ノ両氏帰舎ス  
足助常山溪二游ブ  
五日  
村上雄之助常山溪二游ブ  
六日  
予習科一年生松井秀吉入舎ス  
七日  
足助、村上ノ兩名帰舎ス  
十日 有元新太郎入舎ス、外崎裕入舎ス  
十一日 尾崎、江藤外泊ス、足助素一退舎ス  
十二日 河内完治退舎ス  
入舎ス  
二一日 土曜日二当ル夜六時ヲ以テ寄宿舍  
食堂ニ於テ月次会ヲ催ス、先ツ第一御馳走と  
して豚飯之饗応有リ、来賓として宮部、新嶋  
及ビ石澤等の諸先生及ビ先輩有リ、宮部先生  
先ツ当寄宿舍之沿革を詳述せられ、次に新嶋  
先生之書生時代之雜観を話しせられ次で石沢  
氏之勤儉貯蓄談有リ、会一先ツ終りて之より  
余興に入らんとするやリンゴの饗応有りて後  
余興二入ル、閉会八夜之十二時ナリ

十一月二十三日夜月次会有リ、宮部先生、石  
沢君来舎セラル、菓子ノ饗応及ビ数子ノ演説  
有リテ極メテ盛ナル会合ナリシ、副舎長黄金  
井君八脳病ノ故ヲ以テ当分北八条東三丁目ナ  
ル大井上氏方ニテ静養スル事トナリ、其方へ  
移転セラレ、之二代リテ石沢君入リテ当分副  
舎長トナラル

十月八日  
辻垣入舎ス  
十二月一日 竹田 入舎ス  
十二月二日  
相原退舎ス  
吉川藤右衛門入舎ス(十二月七日)